琉球大学学術リポジトリ

水俣市「村丸ごと生活博物館」は村人を元気にした

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学大学院観光科学研究科
	公開日: 2012-01-13
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 吉本, 哲郎, Yoshimoto, Tetsuro
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002006795

観光科学　第３号（平成23年９月）pp. 73－74
Journal of Tourism Sciences. Vol.3 (September. 2011)

水俣市「村丸ごと生活博物館」は村人を元気にした

Revitalization of Local Community by a Whole Village as a Living Museum in Minamata City

吉　本　哲　郎*
Tetsuro Yoshimoto

水俣市は、水・ごみ・食べ物に世界のどこよりも気をつけ、水俣病の犠牲を無駄にしない環境水俣づくりを進めていた。私は、2001年4月にそれまで６年間携わった環境課から農林水産課に異動した。農林水産行政でやってきたことを調べてみた。わかってきたことがある。それは、職員は忙しいが、今まで、膨大な補助事業と労力・時間を投入した割に成果は見えていないことだった。農業では、特産物であるミカンの販売額４億円弱で、10年で増えるどころか、４割減っていた。（平成３年：2,414トン　634百万円→平成12年：1,181トン　362百万円）。お茶は２億円で横ばい、たまねぎは２億円にも満たない。農家戸数は660戸（１種兼業：64戸　２種兼業：420戸）で水俣の人口の5.3％にすぎない。林業は最盛期の４割以下で推移していた。水産業は壊滅的で専業で食べていけるのは10名もいないし、販売額は１億円にも満たない状況だった。考えてみた。それは農林水産業振興だけではなくて農山漁村の振興もやっていこうということだった。振興とか、活性化という言葉ではなくて元気な村づくりを村丸ごと生活博物館に取り組むことですすめることとした。農山漁村という地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、地域にあるモノやコトに気づいて、磨いていく。地元にあるものを自覚し、自助努力による発展を促すものである。吉本の提唱する地元学の実践である。ただし、2001年度の新規事業は、お金をかけずにやると決めていた。

ここで元気な村とは、人が元気で自然が元気で、経済も元気な村とした。実は、村丸ごと生活博物館に先駆けてやったことがある。７月３日に都市と農村の交流を促進する場として「水俣元気村女性会議」を設置した。９月１日には元気村女性会議で地域通貨「水俣もやい通貨」の試行を開始した。９月21日には水俣市元気村づくり条例を制定した。12月19日には畜産版環境ＩＳＯ制度を制定（2002／５／２に３人認定）し、2002年８月５日に村丸ごと生活博物館第１号として頭石地区を指定することができた。

水俣市元気村づくり条例では、農山漁村一体に進める元気村づくりに三本の柱を設定した。「経済」、「風景づくり」そして「交流」である。ただし、経済には３つあるとした。①「貨幣（お金）経済」、②「共同する経済（結い、もやい）」、③「自給自足の経済」である。この三つの経済の総和が豊かな村づくりに欠かせないが特に共同と自給の経済をまず整えていくこととした。村人は語る。「ここではマチの収入の六割あればやっていける」と。それは、共同と自給する経済があるからである。二番目の柱である「風景づくり」は、使う水でつくられた村の佇まいを生活文化遺産として後世に伝えていこうとするものである。三番目の柱である「交流」は町の人たちも農山漁村の人たちもいっしょにやればいい、それぞれが自ら持っているいいところでつながればいいと考えた。

元気村づくりには「村丸ごと生活博物館」の地区指定が必要になっている。条件は自然環境、生活文化の保持、村の景観などについて方針を定めること、地区環境協定を締結していることがある。指

＊ 地元学ネットワーク主宰

定された地区には、自らの生活文化を誇りをもって説明し案内できる「生活学芸員」が市長により認定され置かれ、優れた生活文化を持つ「生活職人」が認定される。また、環境と健康にいいものづくりを進める環境マイスターの育成がはかられていく。制度の意図は「自覚無くして自助努力は生まれず、自助努力なくして発展はない」からである。

生活学芸員も生活職人も自覚を促すきっかけづくりにつなげたかった。「自分たちが当たり前に生活していることは、本当はすごいことなんだ」と言いたかった。

参考にしたのはフランス発祥のエコ・ミュージアムである。でも、違和感を持つのは私だけだろうか。カタカナであり、外国の事例であり、日本になじませてないし、やってもいないなどの特徴がある。私は、日本にすでにあった何かに響いてこそ、根付くものと考えていた。私は生活だと思い、生活博物館だとした。では、どんな博物館なのかということである。生活している人たちは全て学芸員になれる。ただし、説明し案内できることが条件になる。要するに「ここには何もない」と言わないこと、当たり前のことは当たり前でないことに気づいて自らの生活をちゃんと説明できること、自らの生活を自覚することが条件になる。当たり前にある生活を日常的に調べていないと、意外に説明しにくいものなので、外に出掛けて自らの暮らしを客観的に見つめなおしたりすることが重要になってくる。

水俣では、あるもの探し、水のゆくえなどをすでに調べていたので、それらの調べたことをいかして、農山漁村のいい風景づくりに役立てている。市は事務局の支援に徹した。行政参加という考え方からである。

平成14年８月５日、村丸ごと生活博物館第１号として頭石地区（41世帯）が指定された。併せて、生活学芸員７名、生活職人12名が認定された。

８年経過した今、起きたことを紹介したい。まず、村人たちが元気になっていった。あるばあ様は「生きがいになった、今まで親戚以外に誰も来なかった。今はマチの人も、熊本からも、それだけでなく日本のあちこちからも、そして海外からもやってくる。うれしい」と涙ぐんで語ってくれた。案内は一人あたり1000円、昼食代は1500円である。頭石地区では一割を村に返して新しい共有財産とした。それが50万円を越したという。草払いなどが自主的に行われ、村もきれいになっていった。当たり前にあった草が実は薬草だと気づき、薬草茶として販売するようになった。ある日、マチのお菓子屋さんたちがやってきた。水俣にある栗でお菓子をつくりたいと言った。栗のお菓子がつくられ、村人たちも買いに行くようになった。売り上げ倍増になった店も出てきた。

人と人の出会いが情報と刺激をもたらし、何かが始まっていく。自覚と自助努力による発展なのである。水俣オリジナルといえば聞こえはいいけど、実際はお金がなかったから、知恵を絞り、汗をかいたのだった。今では、大川、越小場、久木野の３地区にも広がり、じいちゃんや、ばぁちゃんたちが元気になっていった。取り組みは、国内では内子町や滋賀県などにも広がり、ジャイカ研修などでも紹介され、タイなどともつながっていった。水俣オリジナルといえば聞こえはいいけど、実際はお金がなかったから、知恵を絞り、汗をかいたのだった。